

Title	ロシアに於ける渤海研究者及び文献について
Sub Title	
Author	小島, 武男(Kojima, Takeo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.1 (1931. 3) ,p.131- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0131">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0131</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ロシアに於ける渤海研究者 及び文献について

## 緒言

此の小文はロシア極東大學教授ゼ・エヌ・マトヴ  
エエフ氏(N. N. Matveev)が一九二九年に同大學  
より發表されたる「八世紀より十世紀に亘る東方  
アジアに於ける渤海」なる論文中、渤海研究者及  
び文献に關する部分を抄譯補註したものでありま  
す。

ロシアに於ける諸氏の研究態度は史籍と並行し  
て科學的見地より(主として歴史考古學)研究の歩  
を進めて居る點と、自己の領域である沿海州地方  
を研究の立脚點として居る等非常に注目すべきも  
のがあると思はれます。私は此の小文によつて、  
ロシアが如何なる方法にて如何なる程度までに其

の研究を進めて居るか、又如何なる文献を有する  
かを紹介いたしたる爲に、此處に掲ぐる次第であ  
ります。多少とも参考とならば幸甚の至りです。

ロシアに於ける渤海研究者としてはヴ・ゴルス  
キー(V. Gorski)、ヤーキンフ・ピチュエーリン(B.  
Iakin)、バラデイ・カファロフ(P. Kafalov)、エ  
ム・ゲ・シエヴェレフ(M. G. Shevelov)、エフ・エ  
フ・ブッセ(F. F. Busse)、デ・エム・ポーズドネエフ  
(D. M. Pozdnev)、ア・ヴ・グレンベンシチヨフ(A.  
V. Grevenshchikov)、ヴ・ア・パンノフ(V. A. Panov)、  
ヴ・カ・アルセンエフ(B. K. Alseniev)等の諸氏  
が居る。ヴ・ゴルスキー氏は最も早くより渤海研

究を志し、種々の論文中一八五二年(咸豐二年)の北京に於けるロシヤ法教使節報告書の中に、「滿洲家屬の始期」と題して研究を發表して居り、其中で渤海王國の統治時代を滿洲史に於ける黄金時代であるとなして居る。

尙、ヤーキンフ(ピチキーン)氏が其の著書「統計的見地よりしたる支那帝國」及び「古代中央アジアに居住せし民族に關する研究資料集」に詳細に述べて居り、殊に前者により、渤海國に關する多種の資料を得る事が出来る、(註、著者は此處に新唐書二百十九卷列傳渤海の一節を引用し居るも、左して重要ならざるを以て省略せり。)

渤海國の政治的方面については、前述の「統計的見地よりしたる支那帝國」第二卷二五四頁以下を見られたし。

支那學者パラデイ・カフロフ氏は支那、朝鮮、日本の資料に精進され、且其れに考古學的見地より研究せられたるもの多く、就中氏の論文、「ヴラデイヴオストック及びニコリスク村邑より南ウスリー地方への人種學的紀行(ロシヤ地理學協會紀

要、第七卷、一八八一年)及び「滿洲史より見たるウスリー地方史考」等ありて、沿海州地方が當時渤海國の領域たりしや否やを明かにして居る。

氏の考古學的研究によれば、概して南ウスリー地方にある多くの都邑は總て渤海國時代のもので、ニコリスクウスリー地方附近の都邑に通ずる碎石道路に遺されたる石弩及び其裝具等を發掘研究せし結果、此等は皆渤海國時代の遺物である事が明かとなり、此の附近の都邑の一つが渤海國都、忽汗城であると言明されて居る。

加之、他の考古學者等は寧古塔附近にある都城の舊跡や碎石道路等は全て渤海國時代のものであるとなして居る。

エム・ゲ・シエヴェルフ氏は、以前久しく沿海州地方に滞在して渤海國に關する地理的研究に意を注がれ、支那語に精通せる氏は、支那史籍、主として唐書によつて渤海國に關する材料を調査され、其の結果非常に多くの貴重なる資料を集め得られたが、残念な事には未だに發表されて居られない事である。(註、此の資料に關しては最近ロシヤ學士院

より發表されたるを以て他日ご紹介いたします。氏の研究は前述の如く、主として地理的のものにして、殊に當時渤海國の領域の沿海州地方に及びし點に關しては殊に意を拂はれて居る。

デ・エム・ポーゾドネエフ氏はシエヴェレフ氏の研究に對して次の如く云はれて居る、

氏は沿海州地方民が當時日本へ漂流したり、又は日本の舟夫が沿海州の海岸に吹着けられた事實の非常に多いのによつて、日本と領域との間に於ける海流について研究をせられ、海流又は支那、日本等の史料の蒐集によつて、日本へ或いは渤海國へ舟夫が漂着したといふ事實より推して、渤海國は單に遼東のみならずヴラデイヴォストックまで領域を擴張して居た史實を證明して居るのである。

(補、邊要分界圖考の一節をお参考に引用してをさす)

肅慎靺鞨渤海ハ即チ滿洲ノ地ニシテ古昔我天朝へ往來頻リニ國史書ヲ絶ズ、是亦其地理ヲ知ラズンバアルベカラズ、陸奥、多賀城ノ碑ニモ宮城郡

ロシアに於ける渤海研究者及び文献について(小島)

西靺鞨國界ヲ去ルコト三千里ト書タレドモ、先輦未ダ其ノ地理ヲ辨ズルモノヲ聞ズ、蓋シ肅慎ヲ以テ朝鮮ノ奥地トノミスレバ其道對馬、長門ノ邊海ヨリ往來スベク又蝦夷ノ奥地トノミスレバ當時樺太ノ奥、山野イマダ關ケヌ、道路イマダ通ゼス、是其說窮スル所以ナリ、以守重考之ニ肅慎靺鞨ハ今ノ朝鮮ヨリハ遙ニ奥地ニテ、則チ今ノ滿洲ギリンスーンクタイポチヨン等ノ地方ナリ、國史ニ載ル所ハ此國ノ人毎ニ佐渡出羽能登ノ邊又蝦夷地へ着岸ノコト比々ト見ヘタレバ、其往來ハ正シク北國ヨリ直ニ海岸ヲ渡リテ、今ノ滿洲邊海カ又ハ朝鮮江源道邊へ着岸セシニ疑ナカルベシ、多賀城ノ碑ハ其ノ船ツ子ニ北國ニ來リシヲ以テ宮城郡西ト書タルハ當然ナレドモ其船中國ノ浦へ着セズシテ、北國ノミへ來ルハ疑クハ江源道ヨリ出帆スルトキハ汐路ニヨリテ北國へ來ルヲ順路トスル、江源道ハ東萊金山浦ヨリ遙ニ東ニアタルナリ、舟師玄海上ヨリ望ムル江源道ノ邊ニ大灣アリト又云日本國ノ海水南海ハ西流、西海ハ北流、北海ハ東流、東海ハ南流ト云ヘリ、然レバ朝鮮ノ東海ト日本ノ西

海トノ間ハ皆樺太領ノ間十八里ノ潮汐北海へ流ル、コトナリ、然レドモ本邦ノ船北國ヨリ乗出シタルハ是亦其疑ナキニシモアラズ、今松前ヨリ大廻シノ船々ハ時トシテ滿洲地ヲ見ルコトアル由ナレバ(松前ヨリ西ニ航スレバ西ノ方ニ地方アリト見ユ必西ヨリ吹返シノ風出ル、ソノ風ニテ朝鮮ノ梅島、竹島ヲ指テ乗ルヲ大廻ト云フ)越前及び松前漂流人ノ乗タル如ク古時ハ其針路アリタルモ知ベカラズ、必今ノ海路ニハアラザルベキナリ云々。尙、ポーゾドネエフ氏は氏をロシアに於ける此の問題に關する最初の研究者であると思倣して居る。然しながら若し、早期の資料が他の研究者等の知る處であつたならば、シェヴェレフ氏は單に渤海と沿海州に關する地理的問題を最初に提出したのに他ならないのであるが。一時上述のシェヴェレフ氏と共に沿海州地方にあつて、該地方を研究した、エフ・エフ・ブッセ氏は散在する碑石を考古學的見地より發掘研究せられた結果、此等の遺物は總て渤海國時代のものであるといふ斷案を下し得たのである、尙氏はウスリー地方の碑文を氏

の論文「ウスリー地方の諸處に點在する遺跡について」アムール地方研究學會紀要第一卷一八八八年」中に詳細に述べて居り、此れに關しては、エール・クラポトキン氏が紀要第十二卷中に氏と共著で述べて居る。

尙此の地方研究についてはヴ・ア・パノフ氏が著書「ウスリー地方史」に述べて居り、其他渤海國に關する根本的の見解を少からず公にされて居る。

雜誌「極東」の記者である氏は極東に關して非常なる努力を同誌に拂ひ、種々の論説を誌上に發表されて居るが、就中バラデイ・カフアロフ氏のウスリー地方に於ける考古學的發掘に關する材料を公にされた事などは非常に喜ばしき事であり、尙一八九二年發行の「極東」に「渤海國に關する日本の文献」と題して發表して居る等氏の熱誠には多く感謝すべきものがある。極東大學東洋部の教授ア・ヴ・グレベンシチコフ氏は地方史に關して特殊の研究をせられ、數、貴重なる研究の結果を發表されて居り、主なるものに「考古學的見地よりしたるアムール地方史考」(一九一六年アムール地方

研究學會五十年紀念論文集にあり)、及び「アムール地方史管見」(全ヴラディヴォストック中にある)等があり、此等の論文によつて吾人は滿洲の過去を研究する基礎を明かにする事が出来るのである、其他、氏は支那書籍より種々の材料を翻譯せられて居るが未だに刊行されないのは惜むべきである。

滿洲語の教授イ・ヴ・ザ・ハロフ氏が著書(滿洲語—ロシヤ語大字典)(一八七五年)ロシヤ學士院出版)中に滿洲族との關係について次の如く云はれて居る、現今の滿洲族と漢民族とは特に確然と區別されて居る、當時にあつて、漢民族の文化に對し憧憬をくあたはざりし彼等滿洲族は非常なる努力を持つて支那語及び支那文學を研究したのである、其の最も盛んな時は唐代であつて、其の第一線に立つた代表的な者は有力なる政權者又は學者等であつたのである、で此等の者は常に其の子弟を支那本國に遣して、言語や文學を研究せしめた。此の支那本國に送られたる子弟の數は非常なもの、例へば八三一年(太和五年)に研究を終へて歸

還した子弟の第一回の數だけでも百五十人と記された程である、此等の歸國した子弟は各地に寺小屋の如きものを建て、讀書の何んたるかを全然解しない土地の青年に教育を授けたのである、彼等青年の讀書力は短時日の間に長速の進歩をなし、遂には單に讀み得るのみならず支那文で立派な書物を編したり、幽雅な詩文を作り得るまでに至つたのである」と。(註、此のザ・ハロフ氏の論文は滿洲文化史に關する貴重な資料なるを以て、他日全文を譯したいと思ふ前記の一章は氏の字典の前節第三頁にある。)

尙、ウスリー地方の研究家である、ヴ・カ・アルセニエフ氏が一九一二年の東洋學會紀要中に「ウスリー地方古代史研究資料」といふ論文を發表せられて居る、此れは渤海國研究には重要な材料の一つに數へなければならぬと思ふ、尙此の外に考古學的研究多し。

總て、前記の諸氏は支那の資料に依る事非常に大であるとして居り、概して諸氏が利用出來たのは唐書其他に他ならないのである。然しながら尙日本及び朝鮮の資料中には貴重なるもの多く、未

だロシア語に翻譯されたもの僅少にして、斷片的事物も多く、一例をあぐれば、ポーズドネエフ氏譯の「岡本龍之助著、北日本及びアジャロシヤ關係史二卷」の如きものがあり、同じく、エゲルマン氏が雜誌「極東」に翻譯されたが、是は單に今日としては文献的に見て珍重されて居るだけである。

尙、私として残念に思はれる事は、渤海國に關する資料中、其の當時の政治、殊に經濟に關するもの、非常に不十分な事である、然し吾人は以上述べたる諸氏の文献を基礎としても、或る程度の完全なる渤海國史を編し得べく、加之、考古學、其他の方法より研究の歩を進め他の諸族等と比較研究をなしたならば、將來には必ずや完璧なる渤海國史を作り得るであらう。

(補、マトヴェエフ氏は、尙西歐諸國の文献を總括的に揚げて居るが萬人熟知の事なれば此處には略します。)

渤海國研究に關して重要なる文献を掲ぐれば次の如し。

Arsen'ev, V. K. Arheographia: pamiatniki staviny v Ussuriiskom krae i Man'chzhurii. (Vestnik Azii. No. 38-39.)

(ウスリヤ地方及び滿洲遺物考)

” Kitaitsy v Iuzhno-Ussuriiskom Krae.

(Zapiski Priamurskogo otdela R. G. O-va. T.

10. vyp. 1. 36-38.)

(南ウスリヤ地方に於ける漢民族)

” Materialy po izucheniiu drevneishei

istopii Ussuriiskogo kpaia. (Zapiski Priam. O-va

Vostokovedeniia, 1912, vyp. 1, 27-32.)

(ウスリヤ地方古代史研究資料)

Bichurin, Iakinf. Statisticheskoe opisanie Kitaiskoi

Imperii, II, 1842, ch. II, 254t256.

(統計的見地よりしたる支那帝國)

” Sobranie svedenii o narodakh, obita-

vshikh v Srednei Azii v drevnie vremena. II,

1851, ch. II, 178 st.

(古代中央アジアに居住せし民族に關する報告集)

Busse, F. F. & Kropotkin, L. A. Ostatki drevnosti v Amurskom krae. (Zap. O-va izuch. Amursk. kraia, T. 12, st. 1-66.

(アムール地の遺物)

Gorskii, V. Nacharo i pervye dela Manchzhurskogo doma. (Trudy chlenov russkoi dukhon. missii v Pakine, 1852.)

(滿洲家屬の始期)

Grebenshchikov, A. V. Istoricheskii ocherk nashego kraia. (Ves' Vladivostok, 1926, st. 116-118.)

(吾地方の歴史)

” K. Izucheniia istorii Ussuriiskogo kraia po dannym arkeologii. (Iubileinyi sbornik O-va izucheniia Amurskogo kraia. Vladivostok, 1916, (考古學の見地よりしたるウスリ一地方史考)

Grebenshchikov, A. V. K. Istorii Kitaiskoi vlasti (Numismaticheskie pamiatniki v Luzhno-Ussuriiskom krae).

(南ウスリ一地方に於ける古泉學の遺物)

” Ocherednaia zadacha kraevedeniia.

Sbornik (Vivat Acadomia). Izd. studentov Vos-tochnogo Instituta, 1915, st. 38-41.

(地方史考主として極東に關する)

Drevnosti Amurskogo i Ussuriiskogo kraia. See

Katalog O-va izuch. Amupck. kraia, st. 109-122.

(古代アムール及びウスリ一地方)

Zakharov, I. V. Polnyi russko-manchzhurskii sloval'.

(露滿字典)

Kalinin, V. A. Kratkii istoricheskii ocherk goroda Nikol'sk-Ussuriiskogo. (Izd. goroda Nikol-Ussuriisk. 1913, st. 2-3.

(ニコラスク一ウスリ一都邑抄史)

Katalov, Palladii. Etnographicheskaiia ekspeditsiia v Luzhno-Ussuriiskii Krai. (Izvestiia Russk. Geogr. O-va, II., 1871, v. p. 2.)

(南ウスリ一地方に於ける土俗學の紀行)

” Istoricheskii ocherk Ussuriiskogo kraia v sviazi s istoriei Man'chzhurii. (Zap. Russk. Geogr. O-va, T. 8, 1879, vyp. 2, st. 221-228.)



(滿洲史より見たるウスリー地方史考)

Margaritov, V. P. Kukhonnye ostatki, naidennye na beregu Amurskogo zaliva, bliz ust'ia reki Sedimi. (Zap. izuch. Amursk. kraia, st. 6.)

(アムール灣岸に於て發見されたる厨房具)

Men'shikov, P. N. Kratkii istoricheskii ocherk Man'chzhurii. (Vestnik Azii, 1917, No. 42, vyp. 2., st. 8-10.)

(滿洲抄史)

Matveev, Z. N. Pervye obitatei Primor'ia. (Sovetskoje Primor'e. 1925, No. 10.)

(沿海州に於ける最初の住民)

Opisanie Korei. Izd. Ministerstva Finansov. II. (1900, ch. I, st. 9-11.)

(朝鮮紀要)

Opisanie Man'chzhurii. Pod red. D. M. Pozdnev. (Izd. Ministerstva Finansov. II., 1897, st. 8-10.)

(滿洲紀要)

Laponskie dokumenty o snosheniiakh s korolevstvom Bokhai. (Dal'nii Vostok, 1892.)

(渤海王國に關する日本文獻)

Pozdnev, D. M. Materialy po istorii Severnoi Iaponii i ee otnosheniia k materiku Azii i Rossii, T. 2., ch. I, st. 12-16.

(北日本史料及び其れのラジヤロシヤ大陸關係)

Fedorov, A. Z. Pamiatniki stariny v g. Nikol'ske-Ussuriiskom i ego okrestnostiakh. (Izd. Iuzhno-Ussur. otdel Russk. Geogr. O-ba nod red. A. V. Grebenshchikova. Nikol'sk-Ussuriisk., 1916, st. 24.)

(ニコラスクーサー都邑に於ける遺物)

Tankovskii, M. I. Kukhonnye ostatki i Kammennye orudija, naidennye na beregu Amurskogo zaliva. (Izvestia Vost. Sib. otdel Russk. Geogr. O-va, 1881, T. 12.)

(アムール灣岸に於て發見されたる厨房具及び石器)

(Петропавловск на Камчатке) 島の群島及び島の群島は「徳島」の「カムチャツカ」(V. A. Gatchev)

の擧げたる極東文献の中渤海に關係あるものを抜  
録しておめがした。）

Avvakum, O nadpisi na kamennom pamiatnike  
na beregu reki Amura, nedaleko ot vpadeniia  
ee v more. (Zapiski Sib. otdel Russk. Geogr.  
O-vi, 1856.)

(アムール河の灣入より程遠からざる地點に  
於ける碑文について)

Al'tan, Zametki o risunkakh na skalakh po rekam  
Ussuri i Bikinu. (Priam. Ved., 1895, No. 66.)

(ウスマリー及びビキン河岸に於ける碑石考)

Baranov, A. Izuchenie o Manchzhurii. Poezdka v  
Girin. 1883, Irkutsk.

(滿洲研究、吉林紀行)

” Izuchenie pamiatnikov drevnosti v  
Manchzhurii. (Bulletin' No. I Muzeia O-va Izu-  
cheniia Manchzhurskogo kraia i Iubileinoi Vys-  
tavki 1923, v Harbin.)

(滿洲に於ける遺物研究)

Grebenshchikov, A. Programnye voprosy po

sobiraniu archaeologicheskogo materiala v krae.  
(Izvestia Primorsko Oblactnoi Arkhivnoi Komii-  
cii, T. I. vyp. I. Vladivostok, 1922.)

(沿海州地方に於ける考古學的資料蒐集に關  
する問題)

Dombrovskii, A. & Voroshilov, V. Manchzhurii.  
1897.

(滿洲)

Eliseev, A. V. Doistoricheskikh obitatel'iax Iuzhno-  
Ussuriiskogo kraia. Spb., 1890.

(南ウスマリー地先史民族)

” Orchet o poezdke na Dal'nii Vostok.  
(Izvestia Russk. Geogr. O-bo, 26, vyp. 5, st.  
361-365, 1890.)

(極東紀行報告)

Iosifov, G. Archaeologicheskie nakhodki v Amur-  
skoi gubernii. (Vostochnaia Studia, 1925, No.  
13-16, st. 269-271.)

(アムール縣に於ける考古學的發掘)

Kotvich, Leksii po istorii Manchzhurskoi literatury,

(滿洲文獻史稿)

Men'shikov, P. &c. Severnaja Man'chzhurija. T. 1. 1916.

(北滿洲)

Nadarov, I. Severno-Ussuriiskii kraii. (Zapiski Russk. Geogr. O-vo. T. 8.)

(北部ウスリー地方)

Panov, V. K. Istorii narodov Severnei Azii. St. 166, 1918, Vladivostok.

(北アジヤ民族史)

Gederovits. Sistematicheskii ukazatel' vsekh izdaniij Vostochno-Sibirskago otdela Russk. Geogr. O-va, pomeshchennykh v nikh statei i zametok za 1900-1911. Irkutsk, 1912.

(1900-1911 に於けるロシア地理學協會東シベリヤ部出版の論文目錄)

Glavneishaia literatura po issledvaniu Dal'nego Vostoka. (Russ. Dal'nii Vostok, 1920, No. 3, st. 34-39.)

(極東研究の主要なる文献)

Gluzdovskii, V. E. Dal'ne-Vostochnaja oblast'.

Ukazatel' literatury o DVO. (Izd. Knizhnoe Delo, 1925, st. 230-236, Vladivostok.)

(極東に關する目錄)

Kazarinov, P. K. Sibirskoe kraevedenie. Kratkii bibliograficheskii obzor poslednikh let 1920-1923. Irkutsk.

(1920-1923 に於けるシベリヤ地方關係目錄)

Katalog izd. aktz. o-va Knizhnoe Delo). Vladivostok, 1926, st. 46.

(書誌社出版目錄)

Matveev, Z. Bibliografiia Vladivostoka. (Ves' Vladivostok), 1926, st. 182-185.

(グラフィオスブックに關する書目)

Mezhov, V. I. Sibirskaja bibliografiia. T. I-III, 1903.

(シベリヤ文献)

Obrucher, Sistematicheskii ukazatel' vsekh izdaniij Vostochno-Sibirskago otdela Russk. Geogr. o-va, pomeshchennykh v nikh statei i zametok za so-rokoletie 1851-1891. Irkutsk.

(1851-1891に於けるロシア地理學協會東シベ  
リヤ部出版の論文目録)

Slobodskii, M. Literatura po etnografi Sibiri v  
etnologogeographicheskikh povremennykh izdani-  
akh 1901-1917. (Sibirskaiia Zhivaia Starina,  
1925, vyp. 3-4.)

(1901-1917に於けるシベリヤ土俗學文献)

Khronologicheskii ukazatel' otd'nykh statei gazety  
"Vladivosto" See "Vladivostok, 1892.

(雑誌ゾラゾイオストツク所載の論文目録)

Iakubovich, Bibliographiia Sibiri, Korei i Manch-  
zhurii. (Izvestiia Vostochno-Sib. otd. Russk.  
Geogr. O-va, T. 29, No. 2 & T. 30, No. 1, 2.  
Irkutsk, 1897, 1899.)

(シベリヤ、朝鮮、滿洲文献)

Panov, V. Kolonizatsionnye vozmozhnosti. Kul'turno-  
istoricheskii ocherk drevnego Priamur'ia. (Dal'-  
nevostochnoe polozenie, 1913, Vladivostok.)

(古代アムール地方史に於ける植民の可能性)

Poljakov, M. Otchet ob issledovanii na ostorove v

Iuzhno-Ussuriiskom krae i v Japonii. (Pilozh. k  
Zapiski Akademii Nauk, No. 6, 1884, Spb.)

(サガレツ、南ウスリヤ地方及び日本研究報  
告)

Razin, A. Archaologicheskaiia razbedka na beregu  
Ussuriiskogo zaliva. (Sovetskoe Primor'e, 1925,  
No. 8.)

(ウスリヤ灣岸に於ける考古史的探究)

Tolmachev, V. A. Drevnosti Manchzhurii.

(滿洲古代考)

Shkurkin, Gorod Khu-gan-chen. Ekonomicheskii  
i istoricheskii ocherk tsentral'noi Mahchzhurii.  
(Izv. Vost. Inst. 1913, Vladivostok.)  
(忽汗城、經濟、歴史的に見たる)

小島武男